アートしんぶん
号外
2020年3月31日(火)
「アートしんぶん」
編集：アントニスきよみ（東京都立光明学園　病弱教育部門病院内訪問学級）、郷泰典（東京都現代美術館事業企画課教育普及係）
デザイン：進士遙
発行：2020年3月31日（火）
東京都現代美術館
（公益財団法人東京都歴史文化財団）
〒135-0022
東京都江東区三好4-1-1
東京都現代美術館
TEL03-5245-4111（代表）
https://www.mot-art-museum.jp/
無断転載禁止

病室から現代美術の魅力を発信！

都内の病院に入院中の中学生と高校生が、オリィ研究所の分身ロボットOriHime（オリヒメ）や、ICT機器を活用しながら、昨年3月にリニューアルオープンした東京都現代美術館のMOTコレクション展「ただいま/はじめまして」（2019年7月20日～10月20日）の作品を鑑賞した。

意外性の連続！

今までみた事のない作品たち

アルナルド・ポモドーロ《太陽のジャイロスコープ》1988年
写真：木奥惠三

東京都現代美術館には、今までに見た事がない作品たちがある。美術の教科書に載っている絵画や彫刻とは異なった作品である。

人物や風景、動物などがモチーフになっているのではなく、ほこりを使って鉄琴やスプーン、ほこり取りを動かす装置が作品として置かれている。

美術館の入口から140メートルの長い廊下を進んだ先にあるコレクション展示室の入口からまず見えるのは、アルナルド・ポモドーロ氏の《太陽のジャイロスコープ》という作品である。

大きさは約4メートルで、重さは5トン、素材は鉄とブロンズである。この作品は、太陽、宇宙、地球などをイメージして造られた。圧倒的な存在感がある作品だ。

「以前は外に設置されていて、もともとゆっくり一日周期で回るように設計されていた」と学芸員の郷泰典氏は語る。

今は止まっている作品だが、作品の存在感を実際に美術館に足を運んで見てみたい。見上げる程の大きさや重量感を生で味わうべき作品だと感じた。（かめちゃん）

知れば見方が変わる!?

衝撃的でおもしろいギャップ！

マーク・マンダース《椅子の上の乾いた像》2011-15年
写真：木奥惠三

作者マーク・マンダース氏の《椅子の上の乾いた像》は、一見すると粘土や木材に見えるが、実はブロンズでできている。

その作品の周りには、ビニールが張ってあり、リフォームの現場のようなアトリエになっている。そのため、見た人はあたかも本物のアトリエと思い込んでしまう。また、像の下には本物の粘土の破片が落ちているため、より見た目にだまされてしまう。さらに像には乾燥したヒビ割れや体に刺さっている木に枝の切り落とした跡などが本物そっくりに表現されている。ヒビ割れた様子からは、月日が経っているが本当はその状態をずっと維持している。この先もずっと変わることのない像である。

高さ69センチ・幅170センチ・奥行き68・6センチの像は、私たちと同じくらいの大きさの頭部や半身が、ギリシャ彫刻のように作られている。

この作品は、想像とは違う作品で、誰もが誤解してしまうような衝撃的でおもしろいギャップがある。日が経つにつれて壊れていくと思いきや何年、何百年も今の状態を維持し続け、不思議な時の流れを感じさせてくれる作品だ。（としちゃん）

色に圧倒される感覚を

ずっと眺めていたくなる絵

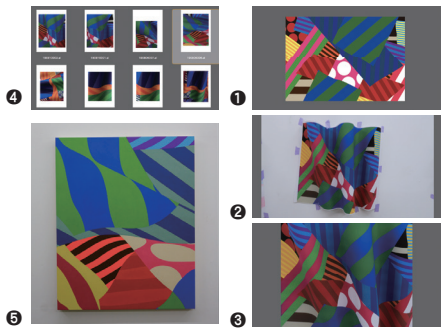
今井俊介氏の作品は、色鮮やかですっと眺めていたくなる絵だ。たくさんのストライプの絵やドットをあつかっており、画面に迫力があり、くねくねしていたり、たくさんの絵が重なりあっていたりしていて面白い。それをどうやって制作しているのかが気になる作品だ。

今井氏の制作過程は次の通りだ。

❶最初にストライプやドットをランダムにレイアウトした柄を作る。
❷①を紙にプリントアウトして、グニャグニャ曲げたりして写真を撮る。
❸写真をいったん四角くトリミングする。
❹できた画像のどこを描くか色々トリミングしてみて描くものを決める。
❺④でできたものからひとつを選んで、キャンバスに写し取って色を塗る。

そして、色鮮やかな作品にした理由は、「こういう色を使い始める前はもっと淡いパステルトーンの色を使うことが多かった」が、あるファストファッションで「とても鮮やかなフリースジャケットを販売して」おり、そのディスプレイを見て、「色に飲み込まれてしまうような感覚」になったという。そこで、「色に圧倒されるその感覚を絵でも感じられたらいいのに」と思ったということだ。さらに今井氏は東京で暮らしていて「街中の看板やネオンなんかがギラギラしていて、たくさんの色に囲まれた生活」であることも作品の色が鮮やかになった理由だと思っているという。また、ある作品では、最終的に10枚以上の絵が重なって作れている絵もあるという。

ストライプのみならず「ドットがランダムに並んだ絵を描いてみたら面白いでしょうね」と今井氏はいう。「いつかチャレンジして絵にしてみたい」という今井氏の作品もぜひ見てみたい。（あいちゃん）



動く作品に興味そそる

意外性のある空間で面白さに気づく

毛利悠子《I／O》2011-16年　写真：柳場大

毛利悠子氏の《I／O》は、ロール紙についた展示室のほこりをセンサーが読み取り、電気信号に変えて、スプーンやハタキなどが動いたり、電球が光ったりする作品である。

例えば、ハタキは床に2本おいてあり、犬がよろこんだ時にしっぽをふるように急に跳ね上がることで、私達を驚かせる。

また、2本の平行に並んだスプーンが上下に動き、それにともないブラインドが開閉する。

他には、一巻のトイレットペーパーが天井から垂れ下がり、小さい水槽に2～3週間かけて沈んでいく。

さらには、鉄琴を立てたようなベルリラからは、突然、目覚まし時計のような大きな音が展示室に鳴り響く。

これらは、人間がたたいて音を出したり、動かしたりするのではなく、ほこりが動かしているのだ。

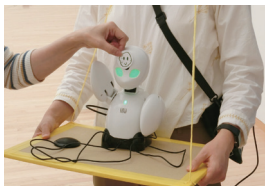
今回の展示では、14メートル（幅）×12メートル（奥行）×6・5メートル（高さ）のサイズの展示室に展示したが、この作品の大きさは決まっておらず、展示室の広さに合わせて大きさが変わる。

美術館といえば、絵ばかりが展示してあるイメージだが、動く作品はとても興味がそそられる。美術に興味が無い人でも意外性のある空間で鑑賞すると、美術の面白さに気づくのではないだろうか。（ちっぷちゃん）

トピック

OriHime（オリヒメ）

オリィ研究所開発の分身ロボット。遠隔操作で手や頭を動かすことができ、音声による会話も可能。美術館での鑑賞活動では、ICT機器と併用して活用した。病室の生徒とコミュニケーションをとりながらの鑑賞は、リアルタイムに反応がうかがえ、まるで一緒に作品を鑑賞しているかのような臨場感が味わえた。（郷）



ミニギャラリー　作品

末永史尚氏の作品 Tangram Painting シリーズを鑑賞して、四角や三角の形を組み合わせて動物などを創りました。1年生はマスキングテープを使いました。3年生はローラーで色塗りをして素材作りからしました。6年生はマスキングテープを色々な向きに貼り、色を付けた素材を使って制作しました。

◁小学部6年
題名「狩り（きつねと鳥）」
〈本人の感想〉
四角と三角だけで作るのがちょっと難しかったけど、なかなか上手くできました。

◁小学部1年
題名「まち」
〈教員より〉
自分の家は三階建てにして、先生たちの家も作り、たくさん家が並んだら町になりました。サンタクロースがプレゼントを持って来られるように、屋根に煙突をつけました。

◁小学部3年
題名「さかな」「うさぎ」
〈教員より〉
一緒に何を作るか相談しながら作りました。ピカピカ光るテープのところが気に入っていました。

編集の小窓

東京都現代美術館は、約3年間の改修工事を経、昨年（2019年）3月にリニューアルオープンした。休館中は、アウトリーチを中心に教育普及事業を展開した。特に距離的な問題から当館への来館が難しい多摩地域を中心に学芸員が出張授業で学校へ出向いたり、アーティストと一緒に訪問するなどした。▼一方、入院や不登校などで距離とは関係なく来館することが難しい状況におかれた子ども達がいる。幸い、休館中に病院内訪問学級の教員や不登校児童・生徒の復学支援施設ともつながることができ、これらの場所と連携するチャンスを得た。▼特に入院中の子ども達とは、分身ロボットを活用し展示室と病室をつなぎリアルタイムで鑑賞活動を実施したり、展示作品を写真に撮ったものを後日ベッドサイドで鑑賞してもらうなど美術館と病室をつなげる工夫をした。この新聞はその成果の一端でもある。▼大切なことは、美術館は外と「つながる」ために、いつでも「ひらいて」いなければならない。（学芸員・郷）

「アートの魅力を発信しよう！」という共通テーマで、病院内訪問学級の小学部から高等部までの子ども達が取り組んで出来上がったのがこの新聞である。副題は「社会や仲間とつながる新聞づくり」とし、都内の複数の病院に入院している仲間とは直接顔を合わせる機会がなくても、新聞づくりを通して共同作業で一つのものを創り上げる喜びや仲間の存在を感じることをねらいにした。▼また、作品の鑑賞活動や記事の作成段階で学芸員、研究所職員、作家の方々と間接的ではあるが関わりをもつことで、病室にいても社会とつながることができた。▼そして、子ども達にとって現代美術は馴染みが薄かったが、その魅力の一端に触れる機会にもなった。▼学芸員の方とのやりとりで得た情報を精査したり、悩みながら言葉を選んだりして、多くの方々に向けて自分の想いや考えを発信することで、小さな病室から無限の広がりをもつ世界とのつながりが期待できる。（教員・アントニス）